

## 木彫り熊、発祥の地・八雲から北海道内へ

7月28日(月) 13:00~14:30 札幌会場

8月6日(水) 15:10~16:40 東京会場

講師 **三浦孝一** 八雲町郷土資料館参事

八雲町の郷土資料館に勤めている三浦と申します。

一般的には、本州の方、北海道の方もそうなのですが、北海道の代表的な土産品である木彫熊と言えば、アイヌの文化でしょうとよく言われます。私もそれで間違いないだろうと思っていますが、最初、熊を彫るようになった始まりと言うのは、元々アイヌの人達が始めた物ではありません。

元々アイヌの人達は、カムイである熊の全体像を彫るという事は数少ないのです。さらにもっと古く言えば、オホーツク海の遺跡からは、セイウチの牙で熊を彫った物も数点出ていますが、基本的には、アイヌ文化の中には、木彫熊、木彫りで熊の全体を彫ることは一般的にはなかったようです。それが、八雲で開拓者が木彫熊を始めて、昭和初期にアイヌの人達も盛んに熊を彫って販売をすることになっていくと言う事なのです。

現在、残念ながら木彫熊は、北海道の土産品としてはなかなか売れない、非常に少なくなっています。昭和40年代は非常に売れて、とにかく作れば売れたと言われていました。北海道で非常に木彫熊が売れたので、北海道だけではなく、長野県で作られた物が北海道で売られたり、さらに台湾や韓国で大量に作られた物が北海道で売られたと言うこともあったようです。しかし、今は、なかなか作っても売れないという時期にきています。

では、その木彫熊の最初は、どう言う所から始まっていったのかということをお話したいと思っています。

日本経済新聞の文化欄に『私の履歴書』という常設の記事があり、著名人が自分の半生について回顧するという欄なのですが、ここで昭和38年に尾張徳川家19代当主である徳川義親が取り上げられています。

それによりますと、「北海道の木彫りの熊は有名である。これは、アイヌの特技のように思われるムキもあるが、実際は私が提唱したものである。大正10年から11年にかけてスイスを訪れたとき、そこに木彫熊がお土産品として売られていた。私はそのとき、ふと、八雲村のことを思った。寒い北海道のことだ、農民たちは冬が来ると家の中に閉じこもっているほかない。私は、その冬場の仕事としてこの熊の木彫りをすすめることを思いついた。」と『私の履歴書』では記載しています。

単純に、この『私の履歴書』を読む限りでは、徳川義親は、ヨーロッパ旅行をしたときにスイスで熊を売っていたので、それを持って八雲の人たちにつくらせようと思ったと理解されやすいのですけれども、実際はそうで

はなく、結果として木彫熊が八雲でつくられるようになったということで、色々調べていくと、最初から徳川義親は、スイスで木彫熊を見てそれを勧めようと思ったわけではないだろうと思っています。それは、農民美術運動というものとかかわってきます。

今日は、八雲と徳川家の関係はどうか、それから、徳川義親と八雲の関係はどうかという事をお話しし、続いて義親の農民美術運動というもの、それから、八雲では、その結果として農民美術研究会というのが出来、それが北海道各地へと影響を与えていく、こう言う順番でお話をしたいと思っています。

今日のお話の舞台となる八雲町ですが、平成17年に日本海側の旧熊石町と太平洋側の旧八雲町とが合併して、現在は八雲町となっています。面積的には956平方キロと非常に広い面積を持っていて、東側は噴火湾とか内浦湾と言われている太平洋側、西側は日本海ですから、現在の八雲町は、日本でただ一つの、一つの町で海から陽が昇って、陽が海に沈む町になっております。非常に面積的には規模が大きいのですけれども、人口的には2万の町です。

徳川家と八雲の関係なのですが、基本的には、八雲町の中心地は、江戸時代は蝦夷地と呼ばれていた所です。ちょうど1800年に、蝦夷地と和人地との境になった、その場所が八雲町なのですが、市街地側は蝦夷地でしたから、明治初期にはほとんど和人が入っていなかった所です。和人という言葉は、北海道では歴史用語として定着しておりますが、いわゆる江戸期以降に本州から来た人達を和人と呼称しています。

元々本州から来た人達たちがほとんど入っていなかった所へ、尾張徳川家が明治維新以後、家臣団の生計を何とか立てさせようと考えてやって来ます。要するに、明治維新で藩が解体してしまいますので、藩士の生活が困窮してくる。その困窮してきた藩士を北海道に移住させて、そこに新しい村を創って、そこで生計が立てられるようにしようと、尾張徳川家の17代当主である徳川慶勝が考えたわけです。1877年、明治10年に北海道の札幌から南側を調査して、その結果、八雲町の、当時は山越内村という所でしたが、現在、遊樂部川が有るその地を開拓地と決めたわけです。

その当時は、北海道開拓使と言う、本州で言うなら県庁のようなものが北海道の開拓を担っていました。1878年、明治11年、その北海道開拓使から土地150万坪の広

大な面積を無償で下付されるわけです。

実は尾張徳川家は、皆さん御存じのように、明治維新のときには、色々な事情がありますが、薩摩や長州と一緒に明治政府を創った方、江戸幕府を倒した方でした。御三家筆頭の藩ですが、江戸幕府を倒す側になった関係で、明治以降も力を持っていたことで、開拓使から広大な面積を与えられて、士族を移住させたわけです。明治11年を最初として、それ以後、何回にも渡って藩士を移住させて八雲町を築くわけです。

その八雲町を築くに当たって、当時は徳川家開墾試験場と言う試験場を設置しましたが、その後、開拓を中心とする徳川家開墾試験場を、徳川開墾地と改めています。さらに、1912年になると、その徳川開墾地は徳川農場と名前を改めます。この徳川農場で木彫熊が行われる事になります。

当時は、尾張徳川の八雲開拓は、基本的には士族移住を目的としたものなので、当初、士族だけに限っていましたが、1888年になると、その士族移住がほぼ終えて、その他に小作を移住させるようになります。そして、その小作で徳川農場を経営して、士族の移住団には、それぞれに土地を与えて独立をさせ、徳川農場そのものは小作移住で賄っていくという形になっていくわけです。この徳川農場は、1948年には徳川農場事務所を閉めてしまいます。この閉めた結果が、八雲の木彫熊の衰退へと繋がって行くことになります。八雲の木彫熊は、この徳川農場というのがバックボーンで、これが母体だったということです。

尾張徳川は明治以後も非常に財力を持っていましたので、開拓移住者を入れるのに、北海道開拓の他の地域と違って、先発隊を入れて、開拓者のための木造住宅を建てたり、蔵を建てることをしました。他の地域の個人の開拓者は、藁ぶきの屋根に、藁ぶきやえん麦などで作った壁という木造住宅ではない開拓小屋が多かったのですが、八雲の開拓は、財力によって、木造住宅を先発隊が建てて、そして移住をしていく形をとりました。

もちろん開拓地は元々人が住んでいなかった所なので、平地であっても、エゾヒグマも生息している地域でもあるわけです。エゾヒグマは、今では山だけにいると考えられていますが、基本的にはエゾヒグマも住みやすい所に住むということなので、平地にも当然住んでいました。そういう所に開拓者が入ったので、開拓者はエゾヒグマを見る機会が結構あったということになります。家のすぐそばの畑の所にエゾヒグマが出ている当時の絵図も残っています。

19代当主の徳川義親は、1886年に越前の松平氏の五男として誕生します。その後、1908年に尾張徳川家18代当主の義礼の養子となって、義親と改めます。この時に、北海道の八雲村を初めて義親は訪問することになります。それまでは北海道八雲村を知らなかったことになりすが、尾張徳川家を継いだことによって、八雲村の農場主、

徳川農場は、義親の経営する農場と変わるわけです。

1918年に、義親は熊狩りを行います。一般的に徳川義親は熊狩りの殿様とか、虎狩りの殿様とよく言われております。非常に熊狩りが好きで、1918年、初めて八雲で熊狩りを行うと、以後、毎年のように八雲に来て熊狩りを行います。熊狩りを行うのは大体冬で、雪のある時期に山に入って行きます。行くときには、当時、ユーラップコタンというコタンがあって、そのアイヌの人たちを道案内に連れて山の中を歩くことになるわけです。

また、八雲と直接は関係は無いのですが、1920年には、八雲町でジョン・パチェラーと会い、それ以後、義親はジョン・パチェラーのアイヌ語辞典について援助をしていくことになります。

それから、1921年にはマレーで転地療養をしています。病気は蕁麻疹だったようですが、気候風土が合わないからなかなか治らないということで、マレーへ行くわけです。その年の5月から8月まで転地療養をした後、ヨーロッパ旅行へ10月に旅立ちます。そして翌1922年、大正11年に帰国しています。このヨーロッパ旅行の時に立ち寄ったスイスで木彫熊が売られているのを見て、それを入手して来ることになるわけです。そして、八雲の農民たちに、作るように勧めたのです。

義親は、スイスから帰って来るとすぐ、1923年に、スイスで購入した農民美術工芸品を八雲に送ります。当時は徳川農場ですから、徳川農場に送る。そして、作るように勧めるわけです。

そして、1924年には第1回農村美術工芸品評会というのを開催します。これは、徳川義親がやると言う事で非常に話題になって、当時の色々な新聞に載ったそうです。この第1回農村美術工芸品評会で初めて木彫熊が出品された事から、それが北海道の一番最初の木彫熊と言われる根拠になっています。

義親が、なぜ、八雲の農民たちのために木彫熊をスイスで購入して八雲へ送ったのかと言う事なのですが、先ほどお話ししたように、義親は熊狩りをします。その時に、アイヌの人たちと一緒に、八雲町には遊楽部（ユーラップ）岳という大きな、1,000メートル位の山が有るのですが、その遊楽部の奥に熊狩りに行く。行ってその日に帰って来るわけにいきませんから、数日ずっと山を巡るわけです。そういう中で、色々なものを見ていくわけです。

その結果、『私の履歴書』にも書いて有りますが、士族の移住者ばかりではなく、すべての農民の生活を向上させなければいけないと思った。要するに、遊楽部を見て歩いている内に、農民の生活が非常に苦しいと言う事をつぶさに見て実感として知るわけです。それで、農民たちの生活を何とか向上させたいと考えるようになっていくわけです。士族移住者は比較的恵まれていましたが、小作人として移住した人たちの生活は大変だったということなので、ですから、士族移住ばかりではなく、小

作人とか、そういう農民の生活を何とかしたいと義親は思うようになっていったわけです。

当時、徳川義親が熊狩りをしているときの写真が残っていますが、中にはアイヌの衣装を着た徳川義親が、ユーラップコタンのアイヌの人たちと共に写っているものもあります。当時の義親は、八雲に来て熊狩りをする、アイヌの人たちが熊を捕ったりした際の熊送りの儀式を大切にしていたようで、当時は徳川農場でやったり、ユーラップコタンでやったり、アイヌの人たちの儀式というものを大事にしていたようです。

ところで、義親がスイスへ訪れたときに木彫熊を売っていて、それを北海道の人たち、八雲の人たちに勧めたいと思ったということですが、その時に八雲の人たちに見本として提供したと物は、資料を見る限りでは、木彫熊だけでありません。

1921年、大正10年から11年当時、ヨーロッパやロシアでは農民美術運動という運動があり、農民の方が、民芸品みたいな物、当時は民芸品という言葉もなかった時代ですが、民芸品みたいなものを作って販売をして、その生活が、どうも義親には良さそうに見えたようです。だから、八雲にもこのようなものを持ってきて、作るように勧めたら、八雲の農民たちの生活もよくなるのではないかと思ったわけです。

では実際に、開拓者の中でそういう民芸品や木彫工芸を作る技術があったのか、木彫工芸にたけた人たちが居たのかと言う事になりますが、むしろ、開拓というのは、当時、生活で使うものがなければ、すぐ物を買うような状態になかった、店が無いわけですから、基本的には自分たちで作る。要するに、自分たちで作れる物は作るという技術は持っていたわけです。

ですから、アイヌの方もそうでしょうけれども、北海道の開拓者も、元々生活に必要な物は自分たちで作って間に合わせると言う事が当時の開拓の大条件ですから、どなたも、ちょっと器用な人であれば、色々な物を作っていたのです。だから、八雲の開拓者の中にも、そういう意味では、木彫工芸とか色々な物を作る素地は元々あったということになります。

義親はスイスで熊の針刺し2点、ペン軸の上に精巧に熊が彫られているもの、ペーパーナイフ、お盆、菓子皿といったような物を購入して八雲に送っています。購入したスイスのベルンと言う所は、その当時は熊の木彫が有名だったようです。

先ほども言ったように、義親は、ヨーロッパやロシアでの、当時は向こうでペザントアートと言っていたもの、農民の美術運動というものを八雲に提唱しようと考えたわけですが、同じような考えを日本で提唱していたのが、山本鼎と言う人です。

山本鼎は、1919年に長野県の神川（かंगाわ）村に農民美術運動の建業趣意書を作って配布をします。要するに、農民美術運動をしようと言うことでの趣意書を作っ

て、全戸に配布をするのです。神川村は今の長野県上田市です。山本鼎の美術館が上田市にあって、当時の資料が展示されています。山本鼎は愛知県出身で、奥さんは北原白秋の妹さんになります。元々は洋画家を目指してヨーロッパに行くのですが、そのヨーロッパの帰りにロシアに寄って、ロシアで農民美術の展示品を見て帰国するわけです。義親はスイスでしたが、山本鼎はロシアで農民美術というものを見て、長野県で農民美術運動を始めると言う事になります。

山本鼎の農民美術運動の建業趣意書を見ますと、基本的には農民の生活をよくしようと言う事は義親とも共通なのですが、山本鼎の手法は、専門の農民美術家を育成することに主眼が置かれています。要するに、専門者をつくり出していく、農民の中から学校などを造り、そういう中で美術家を養成していくことを考えていくわけです。

実は八雲町の郷土資料館には、山本鼎の農民美術研究所が出した出版物が資料として残っています。そういう物が八雲町の郷土資料館に収蔵されていることは、義親はこの山本鼎の運動にかなり関心があったのではないかと思います。

義親はヨーロッパのスイスで木彫熊を買ってきたわけですが、事前にと言いますか、スイスで購入した時には、農民美術運動というのを理解していたかどうかわかりません。しかし、恐らく帰ってきた後の義親は、大正12年、あるいは大正14年に出された山本鼎の日本農民美術研究所の概要などの資料が八雲町に残っていることから、山本鼎の農民美術運動をある程度は知っていて、本人も自分なりのそういう運動を展開しようと考えたのではないかと私は考えています。

山本鼎の農民美術運動は、恐らく徳川義親にかなり影響を与えたのではないかと。徳川義親の農民美術運動に直接与えたと言う証拠の文献は出てこないのですが、実は山本鼎は昭和7年に八雲町で講演もしております。そういう関係で、お互い、山本鼎の農民美術運動を徳川義親もある程度知っていたし、山本鼎も、当然、徳川義親の農民美術運動をある程度理解していたと思われるわけです。この中で八雲の木彫熊が生まれてきたのではないかと考えます。

徳川義親は木彫熊を八雲に送った後、1924年に第1回農村美術工芸品評会を八雲村で開催します。その時に、徳川義親は、農村美術工芸品評会開催の趣意書を作るわけです。作るのは徳川農場の職員が作るのですが、どうも制作前に、徳川義親は職員と綿密な打ち合わせをしていて、職員が趣意書を作って義親がそれを最後に見て、趣意書を完成させたと言う事です。

その趣意書にそって、農民美術の品評会を開催するための作品を募集していく事になるのですが、私はこの趣意書の中に、徳川義親の考え方が凝縮しているのではないかと考えています。

趣意書の中では、農村が、経済の上にも生活、趣味の上にも甚だ貧寒で憂慮にたえないと言っています。青年子女が都会への生活にあこがれて、田園生活を捨てて都会に集中してしまうと。趣意書は大正12年に出来ましたから、大正12年には、今現在の八雲町もそうですが、若い人たちはほとんど都会へ出て行ってしまふ。若い人がいなくなってしまうと言う事になります。小さな町の中ではなかなか仕事がない、それから、やはり若い人たちは都会の生活に憧れて行ってしまふ。これは大正期にもそうだったようで、ほとんどの若い人たちが都会に集中してしまうということを行っているわけです。

趣意書が作られる少し前、大正8年は、北海道の農民たちは、馬鈴薯から澱粉を作っても売れないという事態に遭遇します。実は北海道は明治期、馬鈴薯澱粉を製作し販売をしていました。大正7年以前は非常に景気が良くて、馬鈴薯から作った澱粉が高値で売られていたのですが、第一次世界大戦が終了すると、ヨーロッパ諸国が馬鈴薯澱粉を作り始めて、価格が急激に暴落するのです。北海道の農民たちは、馬鈴薯澱粉を作っても売れない、そのことによって非常に生活が困窮してくる。そういう事態に遭遇して、義親は、青年子女が安堵して暮らせる農村を創らなければならないと趣意書の中で述べています。

趣意書には、そのためには、副業的農村美術の奨励が必要だと記されています。要するに、義親は、農村を立て直すには、副業的な農村美術を奨励して、それで生活を良くしていかなければならないと考えたのです。農村復興の第一歩はここに始まると、要するに、副業から始まるのだと、義親の木彫熊の勧めというのは、根本的にはここに有るのです。

1924年3月26日から28日まで、第1回八雲農村美術工芸品評会が開催され、出品点数は1,098点になりました。八雲町が866点で、八雲町以外からも232点の応募がありました。

実は、義親がやろうとしたのは八雲町内の事だったのですが、徳川義親は徳川家の当主で、当時は貴族院議員でもあり、非常に話題性があったので、色々な新聞が書き立てたものですから、八雲以外からも出品が集まってしまったのです。遠くは愛知県からも集まったそうですが、徳川農場ではそういう物も断らないで展示をしようと展示をしました。

木彫品、木細工が141点、他にわら細工や染色、織物、竹細工、自然木細工、刺しゅう等、色々な種類の物が集まりました。これは単なる品評会ではなくて、展示をして販売をするというものだったので、参加する人たちは、自分の作った物を出品する時に、これを売りたいとするか、参考品として出すか、非売品だということわって出すか、きちんと書いて出すようになっていきます。ほとんどは販売品で、義親の品評会というのは、元々は展示と共に物を売るということが主なわけです。

この中に、徳川義親がスイスで購入した木彫熊をまねて作った物がありました。出品目録によると、2点出品されています。伊藤政雄さんという人が作った木彫熊が2点、これが、北海道の一番最初の木彫熊ということになるわけです。

伊藤政雄さんの作品と、義親がスイスで購入した物を比べて見ると、基本的にはほとんど同じふうで、見本に忠実に作られているのが分かります。スイスの熊は、目に黒いガラス玉がはめられて、口の中は赤く塗られているのが特徴です。昭和50年代のスイスの熊を八雲町郷土資料館で購入したときも、やはり口の中は赤く塗られて、ガラス玉がはめられていました。

伊藤さんの木彫熊は、ガラス玉が無かったので、栓釘を、小さな釘ですけれども、それを目に打ち込んで、それを表しています。口は赤く塗っています。スイスの熊は、毛を細い彫刻刀で彫っていますが、八雲の熊は、当時、三角刀がその時は無かったので、傘の骨を三角刀にして彫ったと言われています。八雲の木彫熊は、義親が持って来た物をモデルにして作っていて、実際の生きている熊よりは、スイスの熊をモデルにしたということになります。

1924年、大正13年に第1回の農民美術研究会が行われ、翌年には第2回の農村美術工芸品評会が開催されます。さらに、大正15年、1926年には第3回農民美術工芸品評会を開催する。開催するに当たって、徳川農場、徳川義親の意向だと思いますが、第3回農民美術工芸品評会で出された物の優秀品は、東京で展示することを考えます。作品を集める時には、いい物は東京へ出品しますよという説明を作品の提出者にしています。

八雲町と長野県の農民美術運動の変遷をみていくと、長野県の山本鼎は、実はかなり早くに東京で農民美術の品評会をやっているのです。義親もやはりこれを意識したのか良く分かりませんが、東京でやりたいという意向が強かったのだらうと思います。

ところが、山本鼎と違うのは、第3回の農民美術工芸品評会をやると、どうもいい作品がないということで、急遽、東京での展示を止めてしまいます。だから、徳川義親としては、自分の目に合った、自分が気に入った物でなければ出さないという、非常に強い力の入れ方があったようなのです。

この大正13年、大正14年、それから15年の農民美術工芸品評会にも木彫熊というのは出されるわけです。大正14年には10点以上の木彫熊が出品されております。それから、15年にはさらにそれ以上の木彫熊が出品されて展示される事になります。

徳川義親は、15年に出品された作品批評中で、品評会に出品されたお盆とか茶托とか茶さじにアイヌ模様の彫り込まれている、それを義親は非常に高く評価しているのです。アイヌ模様の彫り物は、開拓者等が作ったものですが、アイヌ模様非常に義親は興味を抱いていた

ようで、批評の中で、そういうアイヌ模様について高く評価していくということになるわけです。

義親は3回の品評会をやり、木彫熊についてもいいと評価をしていますが、特に熊というふうには決められないでいるわけです。農村美術の作品として、八雲としてどれがいいかということを探索していた期間だったのです。

色々な品評会をやって、いろんな作品を出させて、それがどれがいいか、どれもよくないから、大正15年の品評会では、いずれも該当作品がないと言う事で、東京での出品を止めてしまう。だから、大正13年から15年にかけて、義親は、特に木彫熊という物を選んでいただけではなくて、全体として農村美術運動の中で農民たちがつくる工芸品の中で、どれがいいか、どれが八雲に適しているか、八雲＝何々となるような物が何かあるか、ずっと模索をしていたということになるわけです。

義親は、その大正15年の品評会を終えて東京に帰るとすぐに、徳川農場に、色々な国の民芸品を集め、それから日本各地の民芸品を集めて、徳川農場に送ります。要するに、見本として送るわけです。ですから、あくまでも、熊というふうには決めてなくて、八雲らしい物を作るためにいろいろな見本が必要だろうと、わざわざ集めて八雲の農場に送っています。

外国の物としては、イタリア、オランダ、ロシア、スウェーデン、日本各地の物としては、山形県、秋田県、長野県、さらには滋賀県、茨城県、大分県などのものが送られました。また北海道内の物として川湯温泉の焼き物、トラピストで作られた木彫品なども送られたようです。

このように義親は、世界や日本各地の物を一生懸命集めて徳川農場に送って、それを参考にしていろんな物を作るようにと勧めていく。要するに、八雲＝何々という、農民美術の代表的な物を見出せないでいたわけです。

ところが、1926年になると、千葉県農会技師より木彫熊の購入の依頼が入ってきます。もちろん大正13年からずっと品評会の時に木彫熊が出ていて、それを販売しておりましたから、それが結構知れ渡っていたということなのですが、その農会技師から大正15年に熊を買いたいということの依頼が出てきます。

それから、1927年、昭和2年になると、東京で開催された全国副業品博覧会において、伊藤政雄さんの木彫熊が二等に入賞します。また、奥羽圏の連合副業共進会でも一等に入賞をします。そういうふうに、八雲の木彫熊は、他の作品とは別に、各地で国や県で行われている副業の共進会などで賞を得ていくわけです。

そして、八雲の木彫熊は、あちこちから購入の依頼が入って来るようになります。結果として、この時期に八雲では、木彫熊へと変換をしていくことになっていくわけです。

農民美術運動として徳川義親が勧めて行くなかで、八

雲のブランドを決められないでいるうちに、社会が八雲の木彫熊というのを欲しがって、そして八雲＝木彫熊というものができ上がっていく、木彫熊が八雲の独創的な農民美術品だと評価されたということなのです。だから、社会が八雲の木彫熊というのを決めてくれたということになります。

八雲では、その後、農民美術研究会というのを結成し、徳川農場内で木彫熊の制作講習会などを開催していくわけです。当時は、その木彫熊の制作講習をするのに、良い講師がいなかったで、八雲で一番最初に木彫熊を作った伊藤正雄さん、そして十倉兼行という方が講師となりました。

この十倉さんと言う方は、木彫家ではなく日本画を学んでいたということです。一時期、東京で横山大観や河合玉堂などと日本画を一緒にやっていたことがあり、その後、体を悪くしたのと、親の仕事がうまくいかなくて、それで八雲に引き上げてきて、代用教員をしていたようで、八雲の木彫熊の指導者として徳川農場に招かれて木彫熊を指導することになりました。

十倉さんのつくった作品を見ると、八雲の木彫熊の特徴というのは、昭和の太平洋戦争前は必ず目が入ることと、もう一つは、毛が非常に細かいです。僕も一目見てすぐ分かります。それから、毛が流れるようにハの字になっていることが多いです。

実際の熊は、山の中を歩くので、綺麗にブラシをかけたようなハの字になっているわけではないですが、八雲の木彫り熊はそれが特徴です。この特徴は、つい最近まで続いていました。と言うのは、もう、八雲で木彫熊をやる人がいなくなったので、つい最近、という言葉を使ったわけです。

十倉さんのスケッチ帳というのが八雲の資料館に何冊か残されていて、それを見ると、どうも八雲の木彫熊の特徴は、この十倉さんが学んだ日本画的要素の中のものが出てきているというふうに考えられています。

もう一つ、八雲の人たちが熊を彫る為に、実際に熊を檻の中で飼育していました。徳川農場の中に熊の飼育用の檻をつくって、そこで熊を飼っていた。これは、八雲の人たちが木彫熊を作るのに、最初はスイスの物をモデルにしていたのですが、実際の熊を見ないと、いい熊ができないのではないかとということで、徳川さんにおねだりしたわけです。義親は、すぐに農場内に檻を造って熊を飼育することにしました。2頭飼っていて、子熊が出来たりすると、増えた熊は東京の動物園とかそういう所へ送ったそうです。

1928年、昭和3年に八雲で結成された農民美術研究会では、毎月15日を例会日として、作品の研究発表や参考品の紹介等をして勉強会を開いて制作をしています。

農民美術研究会で出来た物は、徳川農場に農民美術研究会の事務所があって、そこに各会員がつくった物を運びます。できた物を会員の評議委員会を開いて、その中

で値段をつけて販売をするという形をとっています。販売は、基本的には、徳川農場職員がやったのです。この研究会の主体事務をやるのが徳川農場職員なのです。

その徳川農場職員が、大体値段等を決めて、そして販売をした。要するに、農民美術研究会があって、会員が30人前後いたのですが、そこで自主的にやるというよりは、その徳川農場が販売ルートを持っていた。購入を希望するときは徳川農場に申し込んで購入する。そう言うシステムなわけです。ですから、最終的に、徳川農場事務所が閉鎖されると、そういうことが継続できない。それで、その後何人かがやっていくのですが、大体の方は止めてしまうということになります。

この農民美術研究会は、営利を目的にするというよりは、徳川義親の趣旨は、農民の生活を向上させることが目的ですから、売れた物の7割が製作者に入って、残り3割が販売のための費用として使われるという形なのです。だから、研究会というか農場の方には何もお金が入らないシステムになっています。制作者が沢山作って売って、生活が良くなれば良いということが研究会の目的です。

1932年、昭和7年の研究会員の動向を記した資料を見ますと、昭和7年には33名の会員がいました。徳川義親が農民の生計を立てるために進めたのが、結局どうだったのかということなのですが、33名のうち18人は農業者です。後は漁業が1人と、商業、職人が8人、その他不明が6人ということで、半分以上はやはり農業主体の人たちがやっていた。だから、専業というよりは、やはり副業なわけです。副業として制作していたということです。

農民美術研究会の初期の作品を見ると、いずれも熊の大きさは、5～6センチの小さなもので、スイスの木彫熊をモデルにしていますので、どちらかというと、擬人化したものや道具として使えるものが多いです。それと同時に、八雲の木彫熊がおもしろいのは、毛のない、要するに、面だけで表す熊も作られています。毛を立てない、毛を彫らないで、面で表す、そういう熊も作っている、黒く色の塗らない熊も作られているということが非常に特徴です。

では、八雲の木彫熊は、北海道各地にどのように影響を与えたのか最後にふれたいと思います。

昭和6年に発行された『朝日グラフ』には、旭川のアイヌの人たちが焼き物のアイヌ人形を作っている記事が掲載されています。その頃はまだ、余り旭川では熊彫りが作られていない。実は旭川でも、松井梅太郎さんというアイヌの方が、昭和元年に、取り逃がした熊が非常に残念で、その熊を彫ったことがあります。ですから、旭川でも、早くに木彫熊を彫ることは彫っていたのです。昭和元年に松井さんが初めて彫って、その後も少し彫っていたようですが、販売には至らなかったということです。

ところが、八雲の木彫熊は、昭和初期に、現在私どもの資料館にある領収書等で分かる限りでは、東京や長野、それから北海道内の札幌、函館、大沼、旭川というような各地で販売をされておりました。記録としては、韓国にも売られたという記録がありますが、北海道各地で八雲の木彫熊というのは、昭和初期、どんどん売れていったということのようです。今の人は、八雲＝木彫熊ということを知りませんが、恐らく昭和初期は、ほとんど八雲＝木彫熊というイメージが定着していたようです。

八雲の木彫熊の作家の中に柴崎重行という人がいました。この方が昭和2年、自分の作った木彫熊を、熊と常に対面しているアイヌの人に見てもらって批評してもらおうということで、旭川に4体、熊を持って行きました。

アイヌの人に見せて批評してもらおうと思ったのですが、そのアイヌの方は非常に気に入って、批評は余りしなかったようですが、いいものだから譲れ譲れと言うことで、強引に譲らされてしまったと言うことのようにです。柴崎重行は、批評してもらうために持って行ったので、この4体の熊を持って帰りたいのですが、どうしても持って帰ることが出来なくて、八雲の木彫熊の4体が旭川に参考品として残っているということになるわけです。

それから、色々な聞き取り調査の結果では、旭川では、昭和初期、昭和5～6年当時は、確かに木彫熊は売っていました。店屋として熊を売っていたのだけれども、それは八雲の熊がほとんどだったということです。

柴崎重行の作品は、晩年、昭和50年代になると、毛の彫っていない物に変わっていきませんが、当時旭川に持っていった物は初期の物ですから、おそらく黒く塗っていた、毛を立てていた熊だと思います。八雲の中では非常にすぐれた方の作品が、昭和初期に旭川に残ったということです。

1932年、昭和7年に発行された『朝日グラフ』に、旭川の木彫熊制作の記事が載っています。それを読みますと「北海道観光客の一番喜ぶ土産品は八雲の木彫熊であるが、旭川近文のアイヌも熊とは先祖以来おなじみなので、熊の木彫りを制作して売り出す計画を立て、講習会を開いている、もう3～4名は盛んに制作して、販路の開拓に努めている」と書かれています。

ですから、この時期では、熊といえば八雲の木彫熊が非常に有名だったと書いている一方で、旭川でも盛んにアイヌの人たちが集まって、木彫熊を作って販売するように努力をしていると書かれています。旭川での聞き取り調査をした結果では、旭川の熊が盛んに店に出るようになるのは、やはり昭和6年以降だと言っています。

以上が私の話なのですが、基本的には木彫熊は、元々旭川でも昭和元年という早い時期に、松井梅太郎さんというアイヌの方が木彫熊を作った。けれども、それは商売といえますか、販売というものにはいたらなかった。そういう中で、徳川義親が八雲の農民たちの生活を向上

させようとして進めた農民美術運動の中で、木彫熊というのが浮き上がってきて、昭和初期の北海道の土産品として、木彫熊＝八雲、八雲ブランドとなった。それが昭和6年とか7年以降になると、旭川の方でもどんどん作られるようになって販売される。それから、八雲の熊は、北海道の各地の観光地で売られていましたから、白老とか色々な所に波及をしていく。そういう中で、八雲＝木彫熊というブランドが、北海道＝木彫熊というブランドへと変わっていくのが道内への広がりということだと考えています。

八雲の木彫熊のその後の経過をかいつまんでお話ししますと、戦争中は、当然、木彫熊を作る様な状況ではなく、戦後になると徳川農場事務所は閉鎖をしてしまいます。

徳川家の会社そのものは八雲に今も残っていて、本社は東京の目白に八雲産業という会社があり、八雲にはその支社があります。いまだに多くの山林を徳川家は持って、その管理をしているのですが、基本的には、木彫熊の販路を持っていた徳川農場というものがなくなってしまい、八雲の人たちは、最終的には自分たちで売るしかなくなってしまいます。そういう中で、その後、売れなくなってしまいますのです。

八雲の木彫熊は副業として始めましたので、旭川などの産業としてオートメーションの機械を入れたりして、一気に多くの木彫熊を作って販売をしていく中で、八雲はあくまでも最後まで手づくりで行っていました。

昭和30年代、40年代、デパートから注文が有りましたが、40、50と注文がされても、すぐには出来ないということで、細々とつい最近までやってきましたが、木彫熊での生計はなかなか立てられないということで、今では1人だけが、高齢ですが何とか作っています。

その一方で、北海道内では昭和40年代、盛んに各地でアイヌの人たちが木彫熊を作るようになり、販売するようになってから、アイヌ＝木彫熊という文化が、アイヌ文化の中に新しい文化として残っていったということになるかと思います。

以上、私の話を終わらせていただきます（拍手）。